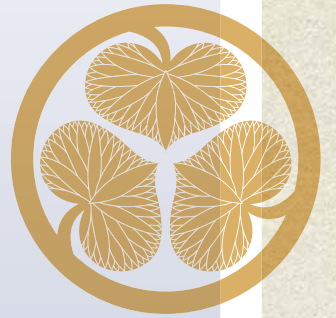


# 静岡駿府と私

【第21回】



## 徳川時代の日本大改造(二) 街道の整備と文化の交流

徳川宗家十八代当主・静岡商工会議所最高顧問 徳川恒孝つねたか



江戸時代以前の旅は大変でした。何時、何処で、何が起こるかわかりません。治安は全く保証されていないのです。

江戸時代になると、街道は整備され宿場が設けられます。宿場には旅籠が並び、馬駕籠を次の宿場まで提供する問屋が出来ます。関所は幕府直轄で、庶民の通行に必要な道中手形と関所手形は、名主さんと菩提寺の和尚さんが出しました。街道には松並木が日陰を提供し、景色の良いところには茶屋が出来、各地の名物が旅人たちを楽しませます。旅は庶民にとっても楽しいものになってゆきます。

江戸時代には四回、爆発的な「お伊勢参り」の流行がありました。宝永二年(一七〇五)の流行時には伊勢松坂を通過した人は日に十万人を超えたそうです。お伊勢参りは一生に一度はやりたいものでしたし、成田山、大山、江ノ島の

弁天様、富士宮、善光寺などの参拜行事は大変に盛んでした。

街道を使った旅のなかでも大きいものに参勤交代があります。各大名が隔年に江戸に滞在する、御正室は江戸屋敷に置いて嫡男も江戸で育てる、代がかわつて將軍に継承を認められて嫡子は領国に「お国入り」する、というシステムです。

最盛期の参勤交代の行列は、石高に合わせて百人から大大名で千五、六百人。これから一年江戸勤番になる侍の召使たちや、荷物を運ぶ人足など、多数の武士以外の若者も同道しました。

この参勤交代制度は各藩の財政を苦しめましたが、一方で、北から南までの武士と若者たちを巻き込んだ組織的な、官費による長い旅と江戸滞在の制度が二百数十年間続いたことは、日本の文化のあり方を大きく変えます。

した。津軽と薩摩の武士や百姓の若者が同じ大都会の空気を吸いながら、芝居小屋の看板を眺めたり、おキヤンな江戸娘を目で追っていたり、一緒に蕎麦をすすったりしたのです。若い武士の多くは江戸で道場に通い、塾で勉強をし、そこで他所の藩から来た若者たちと友人になつていったのです。帰国の時には少し都会風に粋になつて、草紙や細工物、刷り絵や簪をお土産に帰つて行きました。

こんなことを行なつた国は世界中に日本以外にありません。この制度を通じて日本中の人が、自分とは加賀人であり熊本人であると同時に、日本人であることに目覚めていったのです。幕末の政権交代が日本を二分した大戦争にならず、最小限の混乱で、一つに纏まつて新しい方向に向かうことが出来たのも、この下地があつたからだと思えます。

駿府城下行列図(部分、千葉市美術館蔵)